

足立良(横山ゆずり)作 「祈りが届く時」 (前編)

効果音 (学校チャイム)

沢田 潤 は一い、それじゃ今日はここまで。宿題はワークの28ページだからな。それから日直は昼休みに、職員室にプリントを取りにくること。いいな。

日直(青木) 起立、礼。

効果音 (ガタガタ椅子を動かす音、休み時間の生徒たちのざわめき。)

沢田 (廊下を歩きながら、次々と生徒に声をかけていく) やあ青木、部活 頑張ってるか？

青木 ういっす。

沢田 杉田、ほら胸元開きすぎ。ボタンもう1つかけなさい。中村、お前シャツはちゃんと中に入れて。廊下を走るなよ。おっ、浜野。どうだ、新しいクラスは？

浜野あゆみ どうって、別に、普通。ごく普通。

沢田 普通って何だよ。お前、若いのにテンション低いなあ。

浜野 何それ。沢田先生が無駄にテンション高いだけでしょ。なんかそういうノリって生徒としてはちょっと引いちゃうところあるから、先生こそ新しいクラスで嫌われないように、気をつけたほうがいいよ。

沢田 はいはい、浜野は相変わらず厳しいなあ。元担任への優しい言葉はないのか？ それよりお前、今度のバスケの試合、また出られないのか？

あゆみ 地区大会？ 残念だけど、無理。だって日曜なんだもん。

沢田 お前、教会に行ってるんだよな。でも、1回ぐらい休めないのか？ スタメンで出したいのに、もったいないよなあ。

あゆみ んー、子供のころから、家族で行ってるからね。わたしにとっては、部活と同じくらい大事なものだからね、教会は。

沢田 そうか。まあ、しょうがないか。また今度頑張れ。

<タイトル>

沢田ナレーション わたしは沢田潤。小さいころからの夢だった中学校の数学教師になり、早5年。今年は2年B組の担任で、引き続きバスケット部の顧問もしている。まだまだ未熟だが、若い分、生徒たちとの距離も近く、まあ自分で言うのもなんだが、学校の中では生徒たちの兄貴的な存在だと自負している。生徒との関係で悩むこともあるが、真正面から向き合い全力でぶつかっていけば、生徒はきっと心を開いてくれるはず。それがわたしのモットーだ。今話していたのは、去年担任だった浜野あゆみ。いつもわたしの顔をまっすぐに見て、わたしにとってちょ

っぱり痛いことも悪びれずに言うのだが、なぜかその言葉で心が温まる不思議な子だった。あれがクリスチャンのキャラというものなのかもしれない。クラスは離れても、あの子のことはいつも心の中に残っていた――。

(職員室)

教頭 あ、沢田先生、ちょっと。

沢田 教頭先生、何か？

教頭 先生のクラスの鈴木って生徒、ここ2、3日欠席してるでしょう。

沢田 あ、はい。鈴木は「体調が悪いので休む」と、おとといの朝、保護者から連絡があったそうです。鈴木が何か？

教頭 ということは、今日で3日目か。沢田先生、先生のほうから何か直接連絡してみた？ 電話で具合を聞くとか。

沢田 いや、それは…。わたしのほうからは特には…。

教頭 忙しいでしょうが、担任の生徒には、なるべくきめ細かな対応をお願いしますよ。実はさっき、鈴木之母親から校長のところへ電話があったそうなんだよ。母親の話によると、鈴木之欠席は、どうやら体調の問題だけではないらしい。学校に行きたがらないので、本人に問いただしても「何でもない」と言って、話さないそうだ。でも、最近、メールを妙に気にしたり、ケータイが鳴っても出なかったりと、不自然な行動が目立つらしい。それで、母親としては、もしやイジメに遭っているんじゃないかと心配されているわけだ。沢田先生、担任として、何か心当たりはないの？

沢田 鈴木がイジメに、ですか？ うちのクラスの生徒に限って、イジメはないと思います。わたしは担任として、彼らを信じているんですが。

教頭 「信じてます」って簡単に言うけどね、生徒を信じるっていうのは、本当に根気と忍耐の要ることですよ、沢田先生。大体こういうことは、本来なら担任のあなたに真っ先に相談するはずでしょ。なのに親御さんは校長のところへ直接電話してきた。それがどういう意味なのか、考えてみてくださいよ。やはり地に足の着いた指導をしていかないと。

沢田 はあ。…申し訳ありませんでした。

教頭 とにかくね、まず事実関係をつかみましょう。実状を把握した上でないと、対策も立てられないしね。デリケートな問題だから慎重に頼みますよ。

沢田 分かりました。

ナレーション 確かに教頭の言うとおりであった。担任の自分に相談がないのは、保護者から頼りない教師だと思われているからだ。そう思うと、悔しさと怒りがわき起こってきた。一刻も早くこの問題

を解決して、教頭や保護者に自分の教師としての力を認めさせてやる。——そんな思いで、わたしは事の解決を焦った。その時のわたしは、全く生徒のほうを見ていなかったのだ。

石川仁　　なに、沢田先生、なんかもめてるの？ モンスターペアレント？

沢田　　いや、そんなんじゃないです。あの一、先生のクラスでは、イジメが起こったりしたこと、ありますか？

石川　　うーん、あると言えばある、ないと言えない。

沢田　　なんですか、それ。

石川　　だから、イジメがあると認めた時点で、イジメは存在するってこと。大体さ、本当のイジメなんて、大人が絶対に分かんないような形で深〜く進行するものだからね。担任と言ったって24時間見てるわけじゃないし、なかなか気づきませんよ。ましてや親なんて、子供が本気でだまそうと思ったら、コロッとだまされちゃうからね。まあ、分かったところで、教師ができることなんて、たかが知れてるしねえ。

沢田　　いや、できないじゃなくて、教師ならどうにかすべきじゃないでしょうか。

石川　　甘いなあ、沢田先生は。こういうことに関しちゃ、生徒のほうが一枚も二枚も上手だよ。まあ、3年になればクラス替えもあるし、あまり深入りしないほうがいいんじゃないの？

ナレーション　　確かに、教師にとって一番厄介なのは、自分の担任するクラスにイジメが起こることだ。“できることならウチのクラスにだけは起こってくれな”と教師のだれもが願う。もちろん初めからイジメのないクラス運営を目指すことは言うまでもない。でも、子供たちの世界はある意味とても残酷だ。最初は小さな行き違いやちょっとしたからかいだったものが、いつの間にかトゲトゲしい個人攻撃に変わってしまう。親や教師が気づいた時には、もう、“クラス全員対1人”という図式になってしまっていることも多い。そうなると、担任教師一人の手には負えず、学年全体を巻き込んで解決に乗り出さなければならなくなる。当然、担任としてはクラスをまとめ損なった責任と負い目を感じることになる。だから、面倒なことにかかわりたくない教師は、見て見ぬふりをしてやり過ごす。だが、わたしはそんな教師を軽べつしていた。“生徒一人をイジメから守れなくて、何が教師だ！”と言わんばかりに、あとから思えば指導力の伴わない独りよがりの自信を抱いていたのだ。あのころの自分は、教師として、いや一人の人間として、あまりにも未熟だった。

効果音　　(ガラガラ教室の戸を開ける)

沢田　　みんな、ちょっと聞いてくれ。今日のホームルームは、クラスの話し合いにする。

全員　　(ブーイング)

青木　　えー！

杉田　　やだあ、長くなるの？

岡野 オレ部活あるんだよなあ。早く帰りてえ。

沢田 まあ、そう言うな。このクラスにとって、大切なことだぞ。実は、今日で3日連続、鈴木が休んでる。そのことについて、みんなどう思う？ だれか…、青木、どうだ。お前は鈴木と同じ班だろ。

青木 どうって、別に…。風邪でも引いたんじゃないんですか。

沢田 なんだ「風邪でも」って。クラスメートなのにちょっと冷たくないか？

青木 …

沢田 まあいい。ほかに…、岡野はどうだ。

岡野 えっと、鈴木君とはほとんどしゃべったことがないから、分かりませーん。(生徒たちの笑い)

青木 鈴木って、なんか暗いもんな。

杉田 だれとも話さないもんね。

岡野 なんか、あいつってオタクっぽくない？

沢田 こら、だれだ、今言ったの？ 鈴木だって、このクラスの大事な仲間なんだぞ。それにもしかしたら、体調が悪いただけじゃなくて、何か悩んでるかもしれない。学校に来たくない訳があるのかもしれないんだ。まさかこのクラスで鈴木をイジメてるやつはいないだろうな？ 先生は、イジメは絶対に許さないからな。

青木 先生、鈴木が、「イジメられてる」って言ったんですか？

沢田 いや、そういうわけじゃないが、お母さんが、学校で何かあったんじゃないかって心配なさっているんだ。

岡野 マザコンかあ？

青木 それでオレらが疑われんのかよ。

杉田 鈴木君が学校に来たくない訳って言うけど、来たくなかったら休んでもいいんですか、学校って？

青木 じゃ、オレも休みてえ。

沢田 こら、ふざけるな。まじめに考えてくれ。とにかく、イジメはないんだな。先生はお前たちのことを信じてる。だからお前らも、…((FO))

全員 (生徒たちのひそひそ話)

青木 (小声で)なあ、沢田は完ぺきにオレらのこと疑ってない？

岡野 (小声で)だれも鈴木なんかイジメてねえよなあ。

青木 (小声で)「先生は信じてるから」とか言って、口だけじゃないかよ。

岡野 (小声で)ほんと。なーんか ムカつく。熱血教師を気取ってんじゃないよ。

沢田 (FI) えー、とにかく、同じクラスの仲間なんだから、お互いに相手の気持ちを考えて、助け合  
って…。(FO)

ナレーション わたしは、クラスの生徒たちに、仲間を思いやる大切さを分からせようとした。今にして思え  
ば、分からなくちゃいけないのは教師である自分のほうだった。翌日、鈴木が登校してきた。  
それでわたしはすっかりこの件は解決したと思い込んでしまったのだ。ところが4時間目の  
数学の時間――。

効果音 (学校チャイム)

沢田 あれ、鈴木はどうした？

青木 知りません

杉田 保健室じゃない？

岡野 帰ったんじゃないの？

沢田 おいおい、おかしいじゃないか。朝はちゃんといたんだぞ。まさか、だれか鈴木に何か言っ  
たんじゃないだろうな。日直、ちょっと捜してきてくれ。先生も行く。みんなは自習してくれ。

青木 自習ですか。テスト前なのに、オレらのクラスだけ数学遅れちゃうじゃないですか。

沢田 なんだお前ら、そんな考えなのか。自分たちだけ勉強が遅れなければ、クラスの友達はどう  
でもいいのか？ 先生は、そんな考え方は嫌いだ。  
(沢田、慌ただしく教室から出て行く。生徒たちのためいき)

ナレーション わたしは、鈴木の問題の解決に心を奪われて、ほかの39名の生徒をきちんと見ていなか  
った。そんなわたしに対する生徒たちのリアクションは、思いもよらない形で返ってきた。数  
日後の定期考査の数学の答案を見て、わたしは愕然<sup>がくぜん</sup>とした。

効果音 (答案用紙の束をパラパラめくる音)

沢田(モノローグ) なんだこれ？…。どうということだ？(パラパラめくりながら)青木、岡野、杉田、(パラパラ)…  
村本、安田…みんな白紙？…こんなことって…。

ナレーション わたしは一瞬 頭の中が真っ白になった。40枚の白紙の1枚1枚が、無言の圧力となって、  
じわじわ迫ってくるのを、わたしは無意識のうちに感じていた――。

足立良(横山ゆずり)作 「祈いが届く時」(後編)

沢田ナレーション わたしは沢田潤、中学の数学教師だ。教師という仕事には、自分なりに情熱を持ち、取り組んできたつもりだ。生徒とも、気軽に話し合える信頼関係を築いてきたと自負していた。“自分のクラスの生徒は、とことん信じる”、そんな理想の教師にあこがれてもいた。しかし、クラス内にイジメが起こったかも知れない、という状況に遭遇し、わたしは動揺した。自分がダメ教師のレッテルをはられるのが怖くて、焦って問題の解決を図り、かえって生徒たちとの間に溝ができてしまった。担任のわたしへの反発から、定期考査の数学の答案を、ほとんどの生徒が白紙で出したのだ。

<タイトル>

効果音 (職員室。電話が鳴り響く。)

石川 はい、青春中学です。…はい、2年生の、…はい。今日の数学のテストですか？ はい、えっ？ それは…あの…はい、申し訳ございません。…はい、早急にこちらで事実関係を…。(FO)

効果音 (電話が鳴る)

石川 はい、こちら…、はい、はい、…2年の数学ですか。…はい、零点？…いえ、そのようなことは…はあ…。

効果音 (電話、また鳴る)

教頭 (少し遠くから、声を荒げて) 沢田先生！ ちょっと、どうなってるの、お宅のクラス。電話、みんな2年B組の保護者からですよ。子供たちが、「今日の数学のテストは一問も解けなかった」と言って泣いて帰ってきたって。先生、どういうことですか?! みんな零点って、本当なの？

沢田 …申し訳ありません。わたしの責任なんです。…実は…。

ナレーション 思いがけぬ生徒たちからの反発に、わたしはショックを受けた。それと同時に、こんな行為で大人を困らせ、自分たちを正当化しようとする子供たちに対して、猛烈に腹が立った。

効果音 (ガラガラッ教室の戸を開ける)

沢田 おはよう。昨日、このクラスの数学の答案を見た。ほとんどの者が白紙だった。これはどういうことなんだ？ お前たち、先生に何か言いたいことがあるのなら、正々堂々と言ってほしい。こんなやり方は卑怯<sup>ひきよう</sup>じゃないか。まさか、今回だけ全く分からないはずはないだろう。どうだ、青木。

青木 難しくて、できませんでした。

沢田 お前、毎回80点以上は取ってたじゃないか。今回だけ、一問も解けなかったって言うのか？

青木 …分かりませんでした。

沢田 そうか。…杉田、お前もか？

杉田 …できませんでした。

沢田 田中、中村、大谷…みんな同じか？

生徒たち ………

沢田 分かった。何も話してくれないなら、仕方がない。だがな、先生はお前らが正直な気持ちを話してくれるのを待ってる。

効果音 黒板にチョークで何か書く音

沢田 直接言いにくければ、メールでも構わない。これが僕のメールアドレスだ。遠慮しないで、率直な気持ちを聞かせてほしい。

ナレーション その時のわたしは、この問題の根の深さにまだ気づいていなかった。その夜から、わたしのケータイには、大量の嫌がらせメールが送られてきたのだ。

効果音 (ケータイのキー操作音)

沢田(モノローグ) お、来てる来てる。やっぱり今の中学生は、メールのほうが話しやすいというわけか。

沢田 (メールを読む) 先生が「気持ちを正直に言え」と言ったので、はっきり言います。お願いですから、この学校から消えてください。(途中から青木の声で) 沢田ウザイ。「お前らを信じてる」とか、熱血教師ぶってんじゃねえよ。結局オレらのこと疑ってたじゃねえかよ。イジメがあるとか、決めつけてんじゃねーよ！死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね…

ナレーション 一瞬、目を疑った。つい数日前まで気軽に言葉を交わし、笑顔を見せていた生徒たちから送り付けられた、暴力的な言葉の数々。しかも一人一人の顔が全く見えないところからの攻撃だった。アドレスからだけでは、発信者は特定できない。しかし少なくともクラスの半数以上の者が、わたしへの敵意をむき出しにしていることは、はっきりと分かった。わたしはこの時、教師になって初めて、生徒たちに対して“怖い”という感情を抱いた。メールの言葉の裏にある、わたしへの憎しみを感じた時、わたしは怒りでも失望でもない、“恐怖心”を覚えた。何か得体の知れない生き物と対峙<sup>たいじ</sup>しなければならないような、底知れぬ不安。そして、そんなふう<sup>ふう</sup>に生徒を見てしまう自分への、自己嫌悪。それからのわたしは、“生徒の前から逃げ出したい”と思うようになっていった。しかしそんな我がままが許されるはずもなく、更に追い打ちをかけるように、保護者からの厳しい声が学校に寄せられた。

(職員室)

教頭 沢田先生、今週の金曜日、緊急の保護者会を開きますからね。B組の三分の二以上の親御さんから要請があったのでね。学校としては、動かざるを得ないというか。もちろん、先生の言い分もちゃんと聞いてくれるよう、頼んであるから。とにかく、お互いに納得のいくまで話し合うということで。

ナレーション しかしその保護者会は、とても“話し合い”と言えるようなものではなかった。

母親1 この度の定期考査、数学のテストは、大部分の生徒が白紙で出したって、どういうことでしょう？ うちの子も、一つも書けなかったと申しました。

母親2 先生のご指導に問題があるんじゃないでしょうか？ どういう教え方をなさってるんですか？!

母親1 なんでも、テスト直前の授業の時に、勝手なことをした生徒さんのほうに先生はかかり切りで、ほかの生徒はみんな自習をさせられたとか。

母親2 勉強が遅れると心配した生徒さんをしかったそうですね。それに、イジメの犯人のように扱われて、とっても傷ついた子もいるんですよ！

沢田 あ、いや、あれは、そういう意味ではなくて…。

母親1 じゃ、どういう意味なんですか？ 「先生に疑われたことで、数学の授業もテストも、頭が真っ白になってしまう」って、うちの子は申しています。来年は受験生だっていうのに、こんな状態じゃ…。

母親2 はっきり言って、沢田先生の授業はもう受けさせたくないし、担任も変えてほしいというのが、わたしどもの希望なんです。

教頭 いや、そう言われましても、すぐにどうこうというわけには…。

母親1 このままほうっておいて、受験に影響したら、取り返しがつかないんですよ！

母親2 もし学校で適切な措置を取られないのなら、教育委員会のほうに相談いたしますので。よろしいですね。

ナレーション 保護者会は、まるで裁判の被告席に立たされたような感じだった。双方が平行線のまま、最後は校長のとりなしで“2年B組には、もう一人副担任を付ける”“今学期末まで様子を見て、状況が改善されないようなら、学年の途中でも担任交替を考える”ということで、何とかその場は収まった。

しかしその後も、生徒からの嫌がらせメールは続き、次第にわたしは心身ともに疲れ果てていった。学校に行こうとして電車に乗ると、手足の先が冷たくなり、めまいを感じて途中下車をしなければならないほどだった。いつの間にか、あれほどなりたかった“教師”という仕事への情熱は消え、転職さえ考えるようになっていた。そんなある日のこと――。

沢田 (ため息) 受信28件、か。だれだか知らないが、飽きずによくやるなあ、ホントに。

ナレーション そのころのわたしは、暴言メールになるべく傷つかず、自分の心を守るすべを、多少は身に着けていた。とにかく、自分へのメッセージだと思ってはいけない。ただの幼稚な落書きだと思うようにするのだ。教室の隅やトイレの壁に書かれた、バカバカしい落書き。それがたまたまわたしのメールアドレスに紛れ込んできただけ。…そんなふうには思わなければ、パニックになってしまいそうだった。そんなある日、一通のメールが目にとまった。

沢田 (読む)先生こんばんは。わたしがだれだか分かる？ って、分かるわけないか。まあ、先生のクラスではないから、気にしないでください。(途中から、浜野あゆみの声になる)最近の先生の姿を見てたら、黙っていられなくて、メールをしました。先生のクラス、大変みたいだね。友達が1人、B組にいるけど、昨日聞いたら、なんか“担任をつぶせ”みたいなことになってるんだって？ でも、全員がそう思ってるわけじゃないから。強い子たちが威張って、お調子者たちもホイホイ乗っかるし、気の弱い子は逆らえなくて従っちゃうし。そんなわけで、クラス全員が反抗してるみたいに見えるけど、そうじゃない子もいるってこと、一応伝えておきます。先生、負けないで。

沢田ナレーション わたしは、もう一度読み直した。3回読んで、本当に素直に受けとめていい言葉だと確信した瞬間、不覚にも涙がこぼれた。久しぶりにだれかから温かい言葉をもらった。何とも言えずうれしく思いながら、わたしは返信のメールを打った。

沢田 (入力)メールありがとう。あなたは僕のクラスの生徒ではないのですね。それなのに僕のことを心配してくれてありがとう。本当にうれしかった。

効果音 (メールの送信音)

ナレーション それ以来、その生徒と時々メールのやりとりをするようになった。その子、恐らく女子生徒…は本名を明かさず、わたしも、あえて聞き出そうとはしなかった。彼女の言葉にはさりげない温かさがあり、わたしは相手が生徒であるにもかかわらず、いつの間にか本音をもらすことさえあった。

沢田 (入力)今日も、ホームルームの時に、だれも僕と目を合わせようとしなかった。(普通の話す速さに)どうしてこんなに急に生徒たちの態度が変わってしまったのか分からない。初めて味わったショックだけど、だれにも相談できず、ぶっちゃけ、ガックリきてる。けれど、僕はあきらめない。これからも彼らに語り続けていくつもりだ。

効果音 (メールの受信音)

(あゆみ) (入力)先生は、“生徒の態度が急に変わった”と思ってるみたいだけど、ほんとにそうなのかな？ (話す速さに)B組の子たちは“イジメをしてるって、いきなり先生に疑われた”と思ってるよ。生徒の声を聞かないで一方的に熱く語るだけじゃ、先生の気持ちは伝わらないんじゃないかな。

ナレーション 彼女とのやりとりの中で、わたしは不思議な感覚にとらわれていた。その率直な言葉が、すんなり自分の心の中に入ってくるのだ。今までの、教師としての自分の言葉はどうだったのだろうか。自分なりに熱い思いを生徒に対してぶつけているつもりだった。でも、それは、本当に相手を見て、聞いて、発せられたものではなかったのかもしれない。“上辺だけの「熱血教師」じゃ生徒はついてこない。”そんな当たり前のことにさえ、今まで気づいてなかったのだ。

沢田 (メールを打つ音) なんだか君と話していると、生徒という感じがしないのはどうしてだろう。(話す速さに) 君は、自分の考えをしっかりと持っている人ですね。君のその強さはどこから来ているのかな。

効果音 (メールの受信音)

(あゆみ) (入力) 先生に「しっかりしてる」なんて言われると、なんか照れるけど。わたしは全然強くないんです。(話す速さに) 人の目だって気になるし、仲間外れはやっぱり怖い。だから、先生のことも堂々とかばう勇気がなくて、メールぐらいしかできない。でも、その代わり、強い神様にお祈りしてるから。わたしはいつも、つらいことや悩みがあると、すぐにお祈りするんです。あの、最後に「アーメン」っていうやつ。わたしは、やっぱりこの世に神様っていると思うから。わたしは弱い人間で、先生のために何にもしてあげられないけど、その分、先生のためにお祈りしているからね。

ナレーション 「神様」「祈り」という言葉を見た時、わたしの頭に一人の生徒の顔が浮かんだ。

沢田(モノローグ) もしかして、浜野…、浜野あゆみだったのか…？

ナレーション けれど、もはやメールの主がだれかということは、どうでもよかった。周りがすべて敵のような状況の中で、“一人の生徒が、教師である自分のために祈ってくれている。”——今はそのことが何よりもうれしかった。そして、彼女の言葉があれほど強くわたしの心に響いたのは、祈りが込められた言葉だったからだと思い至った。それに比べて、教師である自分は、今までどれだけ生徒のことを思い、真剣に向き合ってきたのだろう。生徒のために祈ることは、クリスチャンでもないわたしにはできなかつただろうが、せめて一人一人に「祈り」に似た気持ちを抱くことさえ、わたしにはなかつた。そんな自分の言葉が生徒に届かないのは当然だ。だが、自分中心の言葉の無力さを突き抜けて、ほんとに相手の気持ちに寄り添った**祈りが心に届く時**、人は変わる。わたしは改めてメールの文字を読み返した。

(あゆみ) (エコー)「先生のためにお祈りしているからね。」

ナレーション その言葉にそっと背中を押されるように、わたしはもう一度、教師としての新しい一歩を踏み出そうと心に決めた。心はボロボロ。これからも何度も傷つき、試行錯誤の連続だろう。でも今、自分の中で何かが変わったのだ。もしまた自分の思いが独りよがりになりかけたら、

わたしも、生徒一人一人の名を挙げて、自分なりの祈りをささげよう。人の祈りがこれほど心に届くものなら、その祈りを聞き上げ、相手に届けてくれる大いなる存在が、確かにあるはずなのだから——。

<完>